

[国 語]

入門期において書く力の基礎を形成する指導

- 1年 「話す」「遊び感覚」を書く力の向上に生かす指導過程 -

金子 善則*

1 はじめに

「アイスクリームお食べました。」「ぼくは、きのう、サッカーを、しました。」昨年度、3年生を担任していたときに見られた表記の間違いの例である。助詞、句読点などの表記の基本事項は1年生の学習内容であるが、3年生でも定着していなかった一例である。このとき、書く力は必ずしも学年と比例して定着していくものではないということを実感した。また、学校では行事の後など、子どもが作文を書く機会が多い。しかし、その割に作文を書くことが好きだ、得意だという子どもは少ない。作文に苦手意識を持っている子どもは非常に多い。

では、どのような条件のときに子どもは書きたくなるのであろうか。それは2つの場合に大別できる。1つ目は、書くことが完全に子どもの自由な発想に委ねられているときである。例として冒険の物語や、「もし自分が…だったら」というようなテーマ作文を挙げることができる。2つ目は、書くことが明確に示されているときである。社会科見学で「目に入ったことを簡条書きでできるだけたくさん書きなさい。」と言うと、ほとんどの子はどんどん書くことができる。見たこと・聞いたことなどの感覚をもとにして「十分間のことを十分間で書く」方法を提言した岩下修氏は、「自分の感覚を確認したり、見つける作業は、発見的な認識をとまなうものであろう。だから、喜んで書くのであろう。」と述べている¹⁾。つまり、子どもは書くことが分かればどんどん書くことができるのであり、子どもの書く意欲を減退させる要因は、「書くことがない」ということなのである。

「書くこと」には、「書く意欲」と「文章表記」という課題が常にある。1年生は入学後、平仮名を正しく読む学習から始め、簡単な文から書き始める。そして、撥音、拗音、濁点、句読点などの表記についても随時学習していくことになっている。いわば、書くことの入門期であると言える。この入門期において大切なことは、「書くことは楽しいという経験を積むこと」、「書き方の基本を身に付けること」の2つであると考えられる。

作文力を伸ばす極意として、野口芳宏氏は、「いつでも書かせる—多作化—」と「おもしろがらせる—血肉化—」を提言し、「作文を書くということはひとつの行動である。一般に行動の習熟には、数をこなすことが最も効果的²⁾であり、「おもしろくてたまらない。もっと書きたい。毎日でも書きたい。そんなことを子どもに実感させるような作文指導を生み出していきたい。(中略) そうでもしなければ、作文力は子どもの血や肉にはなるまい。」³⁾と述べている。書くことの習熟につなげるためには「いつでも繰り返すこと」、それも「面白くすること」が大切だと考えたとき、1年生の児童にとって、「いつでも」、「面白い」というキーワードが当てはまる活動は何か。おそらく「話す」「遊ぶ」活動ではないであろうか。休み時間や給食の時間には、「きのう、おかあさんと…」「こんど、〇〇ちゃんとね…」と、自分の話を聞いてほしくて担任にたくさん話しかけてくる。休み時間になると、鬼ごっこをして遊んだり、お絵かきをしたりして楽しんでいる。「話す」「遊ぶ」という行動は簡単に、楽しく行うことができるので毎日繰り返し、上手になっていく。もし、普段から自然と楽しんでやっている「話す」「遊ぶ」という活動を書く学習に組み込むことができれば、書くことは楽しいという経験を積み、繰り返しによる書く力の定着につなげることができるのではないかと考えた。

さらに、野口氏は、「基礎を教える—堅実化—」として、「作文を書かせていく上で欠くことのできない表記上、表現上の指導事項がある。(中略) これらの基礎・基本にかかわることの指導を確実にしたうえでこそ、(多作化や血肉化などの) 先に述べた提言や極意が生きてくる。」⁴⁾と付言している。

そこで、「書くことがない」ということがないように書くことのイメージをしっかりと持たせたり、正しい表記を習得させたりすることに留意しながら、「話す」学習活動や「遊び感覚」を取り入れ、書く力を高めるために有効

* 新潟市立太夫浜小学校

な指導法、有効な指導過程について考えることにした。

2 研究の目的

「書くこと」の入門期の1年生の子どもにとって、「話す」「遊び感覚」を取り入れた学習活動を仕組むことが書く力を高めるために有効に働くものと考えた。書く内容のイメージをしっかりと持たせ、助詞や句読点などの表記を正しく使って書くことができる力を付けるようにするために効果的な指導法、効果的な指導過程について、以下の手立てを講じ、成果について考察していく。

(1) 音読、間違い探しを取り入れた、基本文型を理解させるための学習活動

1年生では平仮名が定着していなかったり、助詞の「は・を・へ」を「わ・お・え」と混同してしまったりすることが多い。特に助詞については、名詞の後に付くという性質を捉え、それぞれ「くつつきの『は』」、「くつつきの『を』」、「くつつきの『へ』」と名付け、教師の範読を聞く、繰り返し音読をする、文を多く作るなどの学習活動を通して用法を学ぶ。表現パターンを知り、声に出して繰り返し読むことで、正しい表記の仕方を習熟させることができるようになるものと考えた。また、教師が助詞の用法をわざと間違えて示し、子どもに間違いを指摘させる活動を入れた。間違い探しなどのように遊び感覚を取り入れた学習活動を取り入れることで、子どもの学習意欲を高めながら正しい助詞の用法に気付かせ、理解させることができるものと考えた。

(2) 「話す」「遊び感覚」を基にした「書く」学習活動

低学年の子どもたちにとって、自分のことを先生や友達に話すことはとても楽しいことである。しかし、書く学習活動になると、途端に活動が停滞してしまうことがある。何を書けばよいのか分からなかったり、書くことをとても敷居の高いものを感じて委縮してしまったりするからである。そこで、子どもが普段何気なくやっている「話す」「遊び」の要素を名刺交換、間違い探しのような学習活動として取り入れ、「書く」活動につなげていくことができれば、書く意欲を高め、持続させ、結果的に書く力を高めることができるものと考えた。

3 授業の実際

以下の2つの実践は、平成20年に1年生18名を対象にして行ったものである。

(1) 実践1：真似することを通して正しい文章表記を理解する学習活動

～「は を へ をつかってかこう」(光村図書 1年)の実践を通して～

これまで、述語の部分のみを穴埋めすることによって文を作る学習であったが、本単元では、初めて助詞の「は・を・へ」を用いて文を作ることになる。1年生では手本を真似して文型を覚えることが第一であり、それが書き方のスキルを高めることになる。例文を真似したり挿絵を手掛かりにしたりしながら、文を書く力を付けたいと考えた。

① 教科書の挿絵の活用

本単元は、例文と挿絵を手掛かりにして書くべき内容に気付き、助詞を使って単文を作るという学習である。挿絵などの視覚的資料は、子どもたちの興味を惹き付け、理解を助けるという利点がある。実物があるとその効果はさらに高まる。授業では、教科書の挿絵を拡大カラーコピーして提示する。挿絵を見て気付いたことを発表し、教師や友達に認めてもらえることで満足感、達成感も味わわせることもできる。

ア) テンポよく、一気に子どもを引き込む

用意しておいた挿絵の拡大カラーコピー(図1)を提示し、簡単に答えられることを問う。例えば、「木の実は何色ですか。」「何個のりんごがありますか。」などである。子どもたちは、競って手を挙げる。自信を持って答えることができる間だからである。自分の考えが正解である、正解した友達と同じだったとなれば、子どもの学習意欲はさらに高まる。短時間でテンポよく、このような遊び感覚を取り入れた導入を行うことで、挿絵に描いてあることを確認しながら楽しい雰囲気であげ一気に学習に引き込むことができる。

イ) 文を書くための情報の読み取り

教科書には4種類の絵が載っているが、子どもたちにまず提示するのは、さるがりんごを取っている1枚である。まず、本単元での基本文型「さるは とる。」「りんごを とる。」をしっかりと書けるようにするためである。上記のように



【図1】作文の手掛かりにした挿絵

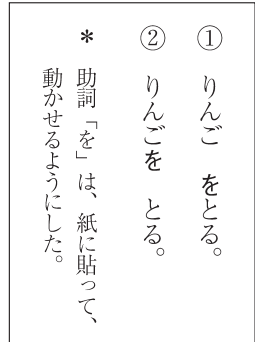
簡単に答えられることをテンポよく問うた後、「さるは何を取っているのですか。」と投げかけた。ここで、基本文型のキーワード「りんご」「とる」という言葉を取り上げて板書し、助詞の用法を理解させる（後述）ようにした。ただ、ここで「りんごを拾っている」「りんごを落としている」など様々なことを発表することが予想されるが、そういった子どもの考えもきちんと認めてあげるように配慮した。

② 助詞の用法を理解させる工夫

1年生にとって助詞の用法を理解するのは難しい。「は」と「わ」の違いを説明した所でなかなか理解できず、集中力や理解度は低下するばかりである。楽しく学習活動をする中で、自然に理解できていた、というふうにした。そのために、教師がわざと間違えて子どもに正しい助詞の置き方を考えさせたり、例文の間違い探しをしたりする学習活動を手立てとし、変化のある繰り返して定着を図っていくようにした。

ア) 助詞の間違い直し

板書した例文に入る助詞の位置を助詞カードを用いて考えさせるようにした。助詞をカードにして位置を移動できるようにすることで、子どもの注目を引き付け、位置を置き変えながら正しい位置を考えてみるができる。具体的には、基本文型「りんごをとる。」であれば、最初は図2の①のように板書した上で音読させた。子どもたちは当然のように「リンゴヲ トル。」と読むが、教師は「リンゴ ヲトル。」と読み、教師の読みの方が正しいのではないかと投げかける。意外な反応を示しながらも、何人かの子は、助詞「を」の位置がおかしいのだと気付くことができた。助詞カード「を」を②のように子どもに移動させてみると、他の子どもたちも納得することができた。このように、物の名前の下に付くので「くっつきの『を』』」と言うこととした。「は」や「へ」についても、例文を変えて用法を学習し、最後に助詞を使った文をできるだけたくさんノートに書くようにした。



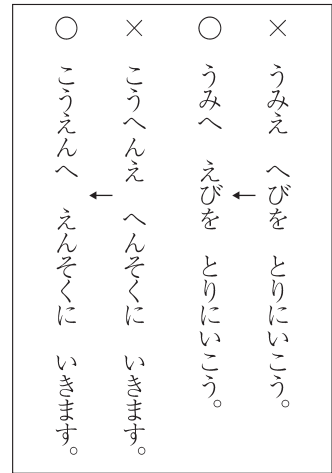
【図2】 助詞の位置を考えた分の一例

イ) 音読

国語では毎時間、音読を取り入れてきた。野口氏は、「低学年でマスターされるのは、声量、読速、なめらかさ、発音の明瞭さ、というような音読の基礎技能である」⁵⁾とし、低学年からの教室音読の必要性を述べている。本単元の文は、主語、助詞、述語という構成になっており、主語と助詞まで読み、一呼吸置いて述語を読むことを繰り返す中で、主語に助詞が付いて文ができていることを気付き、音読の技術を高めることにもなる。単元の勉強が進み、「さる はたべる。」などと板書すると、大半の児童がすぐに、くっつきの「は」だから「さるは たべる。」になると気付くことができるようになった。

ウ) 助詞の間違い探し（「へ」と「え」）

助詞の「は・を・へ」を習った後であっても、実際に文を書かしてみると、「おかし」を「をかし」と書いてしまうなど、同音の言葉を混同して使ってしまうことがある。読んでみると発音自体は正しく聞こえるので、不自然さに気付かないのである。言葉の混同の不自然さに気付き、正しい表記で書けるよう、「へ」と「え」を例にした間違い探しを取り入れた（図3）。間違いの文を板書した上で、正しく直してノートに書くようにし、「え」と「くっつきの『へ』」など、「くっつき言葉」に気を付けて文を書くように伝えた。



【図3】 助詞の用法の間違い探し

(2) 実践2：「話す」「遊び感覚」を取り入れた「書く」学習活動

～「すきなもの、おしえて」(光村図書 1年)の作文活動を通して～

本単元は、友達から聞いたことを友達紹介文として表現するという学習内容である。友達との名刺交換の活動を通して好きな食べ物を紹介し合い、それを紹介文を書く材料にして使うことで、書く活動への抵抗を感じさせないように工夫した。また、間違い探しの学習活動をスモールステップとして設け、句読点や助詞など、表記上の間違いを減らせるようにした。

① 友達から書く材料を集める

ア) 話し方と聞く観点を示す

事前に自分の名前と好きな食べ物を名刺カードに書かせた上で、話し方と聞く観点について指導した。まず、教師が名刺交換の間違いの例をやってみせた。間違いを示すことで、子どもたちから話し方のポイントを引き出すことができる。子どもたちからは、名刺交換のときに必ず話さなくてはいけないこと・聞くべきこととして、「自分の名前」「自分の好きな食べ物」の2つが挙げられた。それと並行して、声の大きさや話す姿勢に気を付けること、あいさつとお礼を言うべきだとの考えが出された。それらの意見は、色紙に書き、名刺交換の手順になるように並べて黒板に掲示した。色紙で視覚的に分かりやすくすることで、名刺交換の手順が非常に分かりやすくなった。名刺交換をしている最中にやり方を忘れてしまった子どもも黒板を見てやり方を思い出し、どの子も友達と名刺交換をすることができていた。

イ) 名刺交換

友達の紹介文を書く前のスモールステップとして、名刺交換を行った。1年生は、教師や友達と話したり物や体を使ったりする学習が大好きである。楽しい雰囲気での名刺交換ごっこを行う中で書く材料を集めることができ、書く意欲につながられるものと考えた。紹介文を書くときには友達からももらった名刺を手元に置くようにし、「何を書いてよいか分からない」という、書くことの阻害要因を取り除くことができた。また、途中で書く内容や平仮名を忘れてしまった子どもも名刺を手掛かりにして自分で文章を書き進めていくことができた。

② 正しい表記で文を書くことができるようにするために

ア) 多彩な音読

読むことができないものは、書くことができない。音読の経験を多く積ませ、内容を読み取っていくことが書くためにも必要である。教科書に掲載されている友達紹介文は2文から成り、濁点、句読点など表記上注意する点が多く含まれている。1年生の子どもが飽きずに繰り返し音読ができるよう、下記のようにバリエーションを変えて音読活動を行った。

追い読み…教師が範読した部分を読む。読速、発音、間の取り方、アクセントやイントネーションの手本を示し、真似させることで音読技術を高めていくことができる。

リズム読み…教師がリズム太鼓で拍をとりながら読む。全員で読速を合わせて読むことができる。また、太鼓の軽快なリズムで楽しく音読をすることができる。

グループ読み…句点や段落で区切って、男女、列ごとなどのグループに分けて音読。

間違い探し読み…子どもが間違いやすい個所や表記上気を付けさせたい個所を教師があえて間違えて読み、児童が正しい読み方に直しながら読む。

読み方に変化を付けることで飽きさせずに繰り返し音読をすることができた。中には教科書の例文を暗記してしまう子どももいた。

イ) 視写

教科書の紹介文とそっくり同じになるように作文用紙に視写をさせた。氏名や書き出しの字空けについては、初出であったので、マス目黒板を用意して全体指導をした。特に、既習であった句読点を置く位置など表記上のポイントに気を付けて書き写すようにした。低学年は、視写のときに分節ごとではなく1文字ずつ写してしまったりして、途中でどこまで写したか分からなくなることがある。そういった場合には、余計な行をミニ定規で隠し、定規を少しずつずらしながら写すようにした。

ウ) 表記の間違い探し

友達紹介文を書く上で注意すべき表記上のポイントは以下の5点である。

- i 平仮名を間違わずに書くこと
- ii 氏名の間および氏名の下は1字分空けること
- iii 書き出しは1字分空けること
- iv 正しい位置に句読点を付けること
- v 助詞を正しく使うこと（「は」と「わ」を混同しない等）

これら表記上のポイントに気を付けて正確な文章を書くことができるよう、マス目黒板を使って表記の間違い探しの学習活動を取り入れた。(図4)

誤文を書いたマス目黒板を提示し、どこか間違いはないか投げかけた。子どもたちからは、「くつつきの

『は』じゃなくて、『わ』を使っている。」などのように助詞を指摘した意見（表記のポイント i・v）、「自分の名前の下は1マス空けないといけない」など氏名の字空けに関するもの（表記のポイント ii）、「点の場所をもっと右の上の方にしないといけない。」など句読点の位置を指摘した意見（表記のポイント iv）が出された。なかなか意見が出されなかった表記のポイント iii（書き出しは1字分空けること）については、教科書と見比べてみるように助言して気付かせた。子どもたちが正しい表記について指摘する都度、マス目黒板の該当箇所に黄色で☆印を付けて、正しく書き直していった。表記上のポイントに☆印を付けることで、紹介文を書く際にそこに気を付けながら書き進められるようにするためである。今まで学習してきた助詞、句読点の位置、氏名の字空けをただ説明するのではなく、間違い探しにして復習することによって、1年生の子どもの学習意欲を高め、積極的な発言を促すこともできる。中には、前時に視写した教科書の例文と比較しながら表記の間違いを指摘していた子どももいた。



図4 表記の間違い探しで提示した文

エ) つまずく子どもへの配慮

表記の間違い探しの学習活動後、交換した隣の友達の名刺カードの内容を作文用紙に紹介文として表現させた。子どもの手元には名刺カード、教室前方にはマス目黒板が提示してある。子どもはそれらを参考に紹介文を書いていった。作文を書くことに習熟していない1年生は、平仮名を忘れてしまったり、字空けを考えて名前を入れられなかったりすることがある。平仮名については、教科書の付録ページを見て調べるようにしてきた。名前をきちんと書き込めなかったり、書き出しの字空けを忘れていたりしている子どもには机間巡視をして助言をした。出来上がった子どもは、教師の所に持ってくるようにし、内容や表記について助言をしたり、赤鉛筆で薄く書いてあげたものをなぞらせたりした。一人の子どもに付ききりで個別指導すると、つまずいている子どもが目立ってしまう。赤鉛筆をなぞるようにすることでそれを防ぐことができ、個別指導を効率良く行うことができるようになる。

4 考察

実践1では、挿絵の拡大提示と助詞カードを用いた間違い直しを取り入れた。書く力を高めるためには、題材を収集・選択する力が重要であるが、この時期の1年生にとってそれは難易度が高いと考え、挿絵を手掛かりにして書く学習活動を仕組んだ。教科書の挿絵を拡大コピーし、「さるは何をとっているのですか。」などのようにクイズ形式で絵に描いてあることを気付かせるようにした。子どもの学習意欲は高く、これから文にしていく内容を遊び感覚で楽しく確認していくことができた。書くことの入門期である1年生にとって、書く素材となる事柄をイラストなどの視覚資料で提示し、書く学習に入っていく手法が有効であることが分かった。

助詞をカードにして位置を操作する学習活動では、抽象的で理解させることが難しい助詞の用法を文字通り手にとって学んでいくことが可能になった。助詞をカードにすることで、文中の助詞に着目させることができた。学習活動を通して教師がわざと間違えるという方法を用いたが、それが助詞の位置を理解させるために有効に働いた。例文、「りんごを とる」について教師が「リンゴ ヲトル」と読み間違えて聞かせることで、「リンゴヲ トル」と読めるように名詞の下に助詞を付けて書かなければいけないことに気付かせることができた。子どもの反応も良く、先生の間違いを直してやろうと積極的に助詞カードを操作していた。

実践2では、書く内容を収集するために名刺交換を取り入れた。名刺を手元に置き、書くことを確認しながら書く姿が認められ、安心して書く活動に取り組むことができていた。1年生が文章を書き進めていく上で、書くことへの不安を取り除く名刺交換を設定したことは、有効な手立てであったと言える。

さらに、表記の間違い探しをすることで、表記に気を付けて文章を書こうとする子どもが多く見られた。1字空け、句読点の位置など、表記上気を付けるべきポイントに☆印を付けて提示することで、隠れていた表記のきまりが視覚的に見やすくなり、児童の理解を助けることとなった。入門期の1年生への指導の構えとして、表記についてあまり細かく指導し過ぎて書く意欲を失わせないようにし、書く楽しさを味わわせる、ということがよく言われる。間違い探しをすることで、子どもの思考を活発にし、書く意欲を失わせることなく、表記のきまりに気を付けて書かせることができた。

5 研究のまとめと今後の課題

子どもが文章を書き進めることができない大きな要因は、「何を書けばよいか分からない」「どう書いていったかよいか分からない」といった不安である。特に、書くことの入門期である1年生には、そういった不安を取り除き、書くことの楽しさを味わわせるようにしたい。

今回の研究を通して、書くことの入門期である1年生に書く意欲を持たせ、正しい表記を身に付けさせながら書く力を高めるための有効な手立てを考えてきた。1年生にとって、視覚的効果のある挿絵や遊び感覚で取り組むことのできる名刺交換や間違い探しなどの学習活動をスモールステップとして設定することが子どもに書く意欲を持たせ、書く力を高めることに結びついていくことが分かった。

実践1は、挿絵を基にして助詞を使った文の書き方の学習であった。子どもには、挿絵を手掛かりにして意欲的に文を書く姿を認めることができた。ただ、中には積極的に文を作る中で「くまを たべる。」などのように現実的ではない文を作る子どももいた。経験の乏しい1年生にとって、よくある間違いではあるが、そういった点も踏まえ、書く力を高めていくためには、多作が必要である。今後も授業時間の書く学習活動や日記などの宿題を続けながら書くことへの抵抗感を減らし、書く力を付けていきたいと考えている。

実践2は、名刺交換や表記の間違い探しなどのスモールステップを取り入れ、正しい表記にも重きを置いた作文学習であった。1年生にとってつまずきの多い「正しい表記で書く」ということを遊び感覚で楽しく理解、習熟させることができた。作文の際には、教科書と同様の作文用紙を用意したが、穴埋め形式のものを用意するなどの工夫も考えられる。発達段階に差がある子どもたちが集まっている教室では、実態に応じてそのような手立てが必要なこともあるであろう。

本稿では、子どもたちの書くことへの苦手意識に着目し、書く力を高める指導法を考えてきた。指導の方向性としては、1年生の子どもたちが意欲的になる「話す」「遊び感覚」の2つを生かし、1年生が抵抗無く取り組むことのできる学習活動を仕組んで、書く力につながるように工夫をした。今回の研究を通して、子どもたちの書く意欲、書く力は一人一人異なることを改めて感じ、書くことを苦手としている子どもたちのつまずいている部分に着目して指導をしていく大切さを感じた。つまずきを持っている児童にとって分かりやすい指導は、全体の子どものためにも分かりやすい指導となる。今後も、子どもたちのつまずきに学び、書く力を高めていくための指導法について考えていきたい。

引用文献

- 1) 岩下 修 『国語の授業力を高めるとっておきの技法30』 明治図書 2006年 pp.59-65
- 2) 野口芳宏 『作文力を伸ばす、鍛える』 明治図書 2005年 p.40
- 3) 野口前掲書 p.44
- 4) 野口前掲書 p.46 括弧内は筆者加筆
- 5) 野口芳宏 『子どもは授業で鍛える』 明治図書 2005年 p.138

参考文献

- 大森 修 『作文指導の秘訣』 明治図書 2005年
 工藤順一 『子どもの才能は国語で伸びる』 エクスナレッジ 2005年
 倉澤栄吉・野地潤家監修 『朝倉国語教育講座 4 書くことの教育』 朝倉書店 2006年
 野口芳宏 『作文力を伸ばす、鍛える』 明治図書 2005年
 野口芳宏 『子どもは授業で鍛える』 明治図書 2005年
 向山洋一 『授業の知的組み立て方』 明治図書 1994年